

三井物産の企業者史的研究

——山本条太郎の社会化の過程——

瀬 岡 誠

I は じ め に

我が国の総合商社の生成と発展のプロセスにおいて決定的な役割を果たした三井物産は、すくなくとも戦前期の後発の貿易商社により、ある種の理念型的なものとして掲げられることが多かった。三井物産は、取扱商品の多角化、海外店の設置、海運業の兼営、三国間貿易、国際的情報の伝達、革新の普及促進者、産業化のオルガナイザーなどの諸機能を有する多機能的組織体の典型として、とくに財閥的企業集団の組織化において、きわめて重要な役割を果たしてきた¹⁾。

この三井物産の生成と発展のプロセスを企業者史的なパースペクティブの下に分析することは、我が国の商社史の研究においてのみならず、経済史や経営史の研究においても、重要な作業であると考えられる。そこで本稿では先ず、三井物産を代表する経営者として山本条太郎という人物をとりあげ、三井物産の企業者史的研究という領域の開拓に着手したい。

山本条太郎は、明治14年に三井物産に入社後、主に上海支店を拠点として企業者活動を展開し、明治34年に上海支店長となる。さらに7年後には東京本店理事となるが、シーメンス事件（大正3年）により三井を退社し、政界へ転身、福井県選出の政友会系代議士として活動、さらに昭和の初期には南満州鉄道の最高経営者として、満鉄王国を支配した。

1) 桂芳男『関西系総合商社の原像』（啓文社、1987年）3～4頁。

II 山本条太郎の成育環境

(1) 出自におけるマージナリティと身近のマージナル・マン

山本条太郎は、慶応3年（1867）10月11日に、福井市旧御駕町に生まれた。山本の出生直後（10月14日）に大政奉還があった。福井藩の下級武士を父とする山本の少年時代は、社会変動の過程を生きる典型的なマージナル・マンとしての特徴を数多く顕在化している。

父山本条悦は小坊主三人扶持というステイタスであった。¹⁾これは「福井藩主春嶽慶永公時代の藩の御給帳」によるものだが、山本の出自が、三菱の創業者と同様、すぐれてマージナルなものであったことを示している。²⁾

母みつは福井藩士渡辺謙七の娘であった。ここでは母よりも、外祖父の渡辺謙七のファミリーに注目しておこう。謙七の妻（山本の外祖母きみ）は豪商三好助右衛門の娘であった。興味深いのは、このファミリーが、いわゆる「ヘイゲン仮説」を想起させるような状況にあった、ということである。³⁾

外祖父謙七は藩の勘定方に属して大いに活動していたが、冤罪のために加賀国白山の麓の牛首という僻地に追放され、限界的な生を強いられたい。なお、その妻きみの弟は松太郎といい、「頗る商才に富み、万延元年福井藩が長崎に創めた物産問屋福井屋の支配を命ぜられ、生糸の海外輸出に従事した」⁴⁾ほどの人物であった、といわれる。おそらく、僻地での謙七のファミリーの支えとなったのは、この松太郎である。しかもこの人物には、のちの山本の企業者的能力を想起させるものがある。

謙七の長男（山本みつの弟）健三は真正のマージナル・マンであった。山本条太郎に与えた影響は決定的である。健三は元治元年、16才に家を棄てて大阪に出て医学を修めたあと、長崎へ行き英学を修めた。そして慶応2年、山本条

1) 山本条太郎翁伝記編集会編『山本条太郎 伝記』（昭和17年）（以下では『伝記』と略記して引用）1～2頁。10頁。

2) 拙著『企業者史学序説』（実教出版、昭和55年）第4章を参照。

3) 同書、82～97頁を参照。

4) 『伝記』4頁。

太郎の出生直前に、英国の軍艦に便乗し欧米に遊学した。明治になってから帰国し、横浜の英一番館チャージング・マジソンの番頭になった。ここで注目すべきは、この健三が、明治5年に同志とともに『東京日日新聞』を創め、さらに10年後には、甥の宏虎童らと『絵入自由新聞』を創刊していることである。⁵⁾ 健三はのちに板垣退助らの自由党に加わる。

健三の新聞の世界での活動を支えていたのは、おそらく、山本条太郎の母みつの姉にあたる宏その子の夫弘海であったろう。その子は福井藩の御殿勤めをしていたが、維新のさいにこれを辞し、弘海に嫁した。弘海は福井市の名利通安寺の住職をしていたが、維新の変動を傍観しえず、弟子で甥の宏虎童とともに還俗して上京し、その子と結婚するとともに出版界に進出した。明治9年11月、弘海は、佐久間貞一、保田久成、大内青巒らとともに、秀英舎を創設しているし、養子になった虎童とともに『万朝報』を創刊したりしている。⁶⁾

ジャーナリズムの世界と革新的な企業者活動の領域とが重なり合う部分を多く有することは、村山竜平や上野理一の生活史などからも明白である。⁷⁾ また、ジャーナリズムの世界と企業者活動の領域との間の、革新者を媒介とする相互作用過程の分析の重要性は、新聞や雑誌を編集し発行するという活動がとりもなおさず、革新的企業者活動であり、しかも三井の中上川彦次郎のように、ジャーナリズム出身の企業者がビジネスの世界において高度の革新性を発揮しているケースが多いことやジャーナリズムとコスモポリタニズムとの間の高度の関係性などの理由から、いくら強調しても強調しすぎることにはならない。⁹⁾

このように、明治初期の新聞の世界で活動した健三や弘海や宏虎童が身近に存在したことは、山本条太郎の成育環境の構成要素のなかでも、もっとも重要なもののひとつといえよう。なお健三は「吉田」という姓を称したが、これ

5) 同上、31頁。春原昭彦『日本新聞通史』（新泉社、1987年）26頁。

6) 同書、18～19頁。

7) 拙稿「江州系企業者と準抛集団(-)」(『研究紀要』第21号) 68～71頁。

8) 拙稿「江州系企業者と準抛集団(=)」(『研究紀要』第22号) 33～39頁。

9) 拙著『企業者史学序説』143～146頁。

は「一旦渡辺家を出て同族の廃絶した家名を襲いだもの¹⁰⁾」といわれる。

吉田健三の妻士子は幕末の鴻儒佐藤一斎の孫娘であったことも、のちの山本条太郎の意識と行動を分析するさいに重要となろう。公式には朱子学を教えながらも、陽明学に心酔して「陽朱陰王」といわれ、『言志四録』を世に問い、渡辺華山・佐久間象山・中村正直・横井小楠らを育てた佐藤一斎もまた、典型的なマージナル・マンであった。上京後の山本はその孫娘を女主人とする横浜の吉田家に足しげく通ったのである。

なお、吉田健三と夫人士子の間には子女がなかったので、土佐出身の政治家で友人の竹内綱の五男茂を養い、これを後嗣とした¹¹⁾。のちに牧野伸顕（大久保利通の二男）の長女を妻とし、政界で活躍する吉田茂である。

さて、山本条太郎の出生後まもなく、父条悦は藩の小算格となった。ちょうどこの頃、王政復古の大号令があり、松平春嶽は議定となっている。慶応3年12月のことである。

明治元年は、既述のように、叔父吉田健三が帰国した年だが、1月に鳥羽・伏見の戦いがあり、3月には五ヶ条の御誓文が宣布された。この年5月、徳川亀之助（後の家達）は駿府に封じられ、70万石を与えられた。この亀之助は田安家の出で松平春嶽の甥に当る人であった。ここに「宗家存続の願」が成ったといわれる¹²⁾。

明治2年3月に東京遷都、6月に版籍奉還があり、松平茂昭は福井藩知事となる。同年7月に松平春嶽は民部卿となり、8月に大蔵卿となった。

明治3年に福井藩は米国人グリフィスを招いて「科学教育」を担当させた。この時すでに、かつて橋本左内の経営によりその革新性を高く評価された藩校明道館は明新館として生まれ変わり、洋学の部門を設けていたのである。橋本左内は、周知の如く、幕政の変革による統一国家の実現、欧米の技術革新の導入、日本とロシアの提携などを主張、松平春嶽に認められて、御書院番や藩校明道

10) 『伝記』29頁。

11) 同書、32～33頁。

12) 同、12頁。

13) 同、13頁。

館学監をつとめたが、安政の大獄により刑死した。

(2) 東京移住

山本条太郎は4、5才ぐらいまで、「貧乏侍の小粋」として、浄土宗を奉じる一家とともに福井に住んでいた。なお山本の父は明治4年2月、松平茂昭に従い上京し、5月に再び茂昭に従って福井に戻っている。それからまもなく廃藩置県があり、11月に松平邸は日本橋浜町に移っている。

なお、この年3月、山本の叔父吉田健三は丸山作楽らの「朝鮮経略」にコミットしたが、発覚して成らず、丸山は処罰された¹⁴⁾。これより約半年後、岩倉具視は、大久保利通や伊藤博文とともに、遣外使節として欧米に渡っている。かれらは帰国後は征韓論に反対し、内政充実を強く主張するにいたる。

岩倉や大久保よりもはるかに早い時期に欧米を熟知していたはずの吉田健三が丸山らの征韓事件にコミットしたのは、ひとつには、藤田東湖や西郷隆盛らと交流のあった橋本左内の絶対主義的改革の理念の影響によるものかもしれない。これを契機に吉田は既述のように『東京日日新聞』を創刊するにいたる。そしてのちに自由党にコミットし、板垣退助、後藤象二郎、林有造、大江卓、竹内綱らと交流し、かれらの政治活動の資金調達役を担うにいったといわれる。吉田は当時横浜に住み、横浜の第一級の実業家であった増田勘七、伏見近三、左右田金作らと緊密な関係を築いていた。そして吉田自身も事業に成功し、「巨万の富」を作ったが、「資金の融資」は主として同県人で横浜の成功者上郎幸八に依頼したらしい¹⁵⁾。

明治5年2月、廃藩のために絶望的な状況にあった山本条太郎の一家に対して、松平家から朗報が届いた。それはまさに快報であり吉報でもあった。家族引きまとめて上京せよとの内命であった。この内命はその後の山本条太郎の生活史の転換点となるものである。すなわちこの内命がなければ、山本は依然として福井に在住し、この年9月に開通した東京と横浜の間の鉄道に乗ることもなく、この年に頂点を迎えた「コミュニケーション革命」に直接、自分の肌

14) 同、30～31頁。

15) 同、31頁。

で触れることもできなかったろう。

明治 5 年の夏、山本条太郎の一家は上京して、松平邸内に住むことになった。この直前（4 月）に東京と大阪の間に電信が開通しているし、7 月には郵便が施行されている。半年前に叔父の吉田健三がその創刊にコミットした『東京日日新聞』は、東京において初めての日刊紙であり、これに続いて、J・R・ブラックの『日新真事誌』や、前島密がコミットした『郵便報知新聞』などもこの明治 5 年に創刊されたのである。¹⁶⁾

（3）松平邸内での生活

明治 5 年の東京移住は山本条太郎の生活史に大きな変化をもたらした。まず住居が、それまでの「お組もの」の粗末な小家屋から、松平家の邸宅の一隅に移った。ここで山本は、同藩の天心岡倉覚三の一家を知るにいたる。

天心はこのとき 10 才、山本は 6 才であった。年令の関係から、山本は天心の弟覚平と親しくなった。¹⁷⁾

明治 5 年 8 月、山本の父は松平家の家族となった。なお、山本の父は版籍奉還後の明治 2 年 11 月に松平家の家職に用いられることになったが、明治 4 年 7 月の廃藩置県後はその職を免ぜられていた。¹⁸⁾同年、由利公正（福井藩士三岡八郎）は銀座市街の建設に尽力した。由利は横井小楠の弟子として知られ、橋本左内らとともに福井藩の改革に貢献、維新後は参与、会計官知事として活動、この当時は東京府知事をつとめていた。

明治 6 年 2 月、妹さんが生まれた。なおこの年に三井家は国産方を設けた。これは三井物産の母胎ともいえるものである。

同年 10 月、征韓論に破れた西郷らは下野した。山本の叔父吉田健三が属した準抛集団のリーダーである板垣退助は愛国公党を組織し、民選議院設立建白書を提出するにいたる。

明治 8 年 4 月、山本の一家は浅草今戸に移った。これは松平茂昭邸の移動に

16) 春原昭彦，前掲書，26～27頁。

17) 『伝記』17頁。

18) 同書，14頁。

従ったものである。当時、松平春嶽は浅草橋場町の真崎邸に住んでいた。なお、明治6年12月に、天皇皇后の真崎邸臨幸があった。¹⁹⁾

明治8年11月、母みつが28才で他界した。この時山本は9才であった。山本の伝記の著者は、これを山本の生活史における「最大不幸事」とし、山本が「三井の小憎」となった主要因であると指摘している。²⁰⁾この指摘は注目してよい。母の突然の他界は息子のマージナリティとけっして無関係ではないからである。まもなく山本条太郎は伯母宏その子のもとに引き取られた。

(4) 小学校時代

当時、印刷業やジャーナリズムの世界の重要性を深く認識していた宏その子の夫宏弘海の生活を身近に観察しえたことは、山本にとり大きな収穫であった。これにより彼のコスモポリタネスは大いに高まった。その後、山本の父は後妻を迎えたため、それまで離散していた一家は再び一緒に住むようになった。それはちょうど、貿易会社先取会社と三井組国産方が合併して三井物産（社長益田孝、資本金5万円）が設けられたころであった。廃刀令を契機として、神風連の乱や秋月の乱が復古的攘夷主義を掲げる士族により引き起されたのは、その直後である。

山本は翌10年1月、松平家とともに小石川水道町安藤坂邸に移転、礪川小学校に通うこととなった。当時、福井は石川県に属しており、小学校の記録には山本は石川県士族として残っているといわれる。²¹⁾

「貧乏侍の小悴」であろうと、「石川県士族」と呼ばれようと、山本が下級武士の社会層を出自として有し、ひたすらマージナルな状況を生きていたことだけは確かである。

マージナル・マンがおかれた状況に反応する様式としては、折原浩によると、以下の三つが考えられる。すなわち、マージナル・マンは、二つの異質な社会圏（A・B）の境域に立って、それぞれに属する他者（a・b）の心に自分の

19) 同, 17頁。

20) 同, 18頁。

21) 同, 19頁。

姿を映し、その他者の眼を通して自分を見るのだが、かれがおかれた状況への反応の様式としては、(i)状況を構成する **a** や **b** の否定的評価に対して衝動的、攻撃的に反応するもの、(ii)逆に **a** や **b** の否定的評価にコミットすることによって攻撃衝動を自己に向け自己を破壊するもの、(iii)「革新的・創造的な対応」²²⁾以上の三つがある。

結果的には、山本条太郎は、神風連の乱や秋月の乱を引き起こした不平士族のように、(i)や(ii)の様式をとらず、(iii)を志向するにいたる。しかしそれは、ひとつには、既述のように、吉田健三や宏仏海のような革新的な人物が準抛人的存在として身边にあったことや、後述するように、革新性が高いことで知られた松平家の人々と緊密に交流する機会が与えられたこと（これは「貧乏武士の小倅」としては異例のことであった）などから明らかなように、いわゆる「社会化の過程」(the process of socialization) が山本の革新性を培養するうえできわめて好都合な諸要素により構成されていたからである。

(5) 松平家の人々との交流

山本の父の同僚の大半が維新の激動期に職を失ったにもかかわらず、山本の父自身はその卓越した事務的処理能力の故に、漸次藩主の側近としての役割を担うにいたった。このためその息子である山本条太郎は、同じ年の松平家公子康莊の遊び相手としての役割を与えられて松平家に入出入りすることができた。そして、松平春嶽（慶永）や松平茂昭の左右で御用をつとめることもあったらしい。²³⁾前者は新政府成立後、議定、内国事務局輔、民部官知事、侍読、大蔵卿などを歴任したが、この頃は第一線を引いていた。

山本はこの旧藩主から「維新当時の物語や橋本左内を始め偉人傑士の話」を何度も聴かされただけでなく、この人の英語の勉強の「稽古台」さえつとめた。²⁴⁾なお山本が英語の「稽古台」になりえたのは、叔父吉田健三の存在とけっして

22) 折原浩『危機における人間と学問——マージナル・マンの理論とウェーバー像の変貌』（未来社、昭和45年）278～280頁。拙稿「渋沢栄一における革新性の形成過程」（『大阪大学経済学』第26巻第1・2号）202～204頁。

23) 『伝記』21～22頁。

24) 同書、23頁。

無関係ではあるまい。当時、吉田は英一番館3年在勤の特別賞与として入手した1万円を資金にして企業者活動を展開していた。

山本条太郎が小石川水道町の安藤坂邸において生活しはじめころ、西南の役が起きた。西郷隆盛の実弟従道は先の台湾出兵（明治7年5月）には台湾蕃地事務都督として活動したが、西南の役にはコミットしなかった。吉田健三の準抛人的存在であった板垣退助らは、翌11年4月に大阪で愛国社の再興発起人会を開催した。さらに同年9月に愛国社再興合議書が定められ、土佐の士族グループ以外にも、越前の杉田定一や筑前の頭山満らの有志がこれにコミットするにいたった。²⁵⁾杉田は明治8年11月に『采風新聞』を起こしたが、翌9年に海老原穆の『評論新聞』（明治8年3月創刊）にコミットし、士族民権の立場から政府の政策を批判、のちに自由党の領袖株となった人物である。また頭山満は福岡藩出身で、矯志社という不平士族グループにコミットして捕われ、西南の役の後に出獄してから自由民権運動を展開していた。のち平岡浩太郎らと向陽社や玄洋社を結成し、杉浦重剛のグループとも緊密な関係を築く。

(6) 共立学校入学

明治11年10月、山本は礪川小学校上等第2級の前期を修業した。しかし身体はあまり丈夫ではなかったらしい。松平公の日記『礪川文藻』とは、翌12年の3月11日に「山本武倅丈太郎不快ニ付道明寺砂糖一重被下」とある。²⁶⁾また同年4月12日には「山本武倅不快々気祝トシテ赤飯一重ヲ呈ス」とある。²⁷⁾そして、同年10月、礪川小学校高等1級前期を修業した。継母てるがやってきたのは、ちょうどこの頃であろう。

明治13年3月、山本は14才で礪川小学校高等1級後期を修業し、神田の共立学校に入学した。共立学校は大学予備門の予備校であった。当時、アメリカから帰ってきた高橋是清が校長をしていた。高橋は幕府御用絵師の子として生まれ、のちに仙台藩士高橋是忠の養子となった人物で、これより約32年後、第1

25) 『上野理一伝』（朝日新聞社、昭和34年）。

26) 『伝記』22頁。

27) 同書、同頁。なお『礪川文藻』では山本条太郎は山本丈太郎と表記している。

次山本内閣の蔵相となる。政友会系の政治家である。

共立学校の同期生には、黒田清輝、小笠原長生、松方幸次郎らがいた。なかでも、のちに川崎造船所の最高経営者となる松方幸次郎は、山本権兵衛の女婿でシーメンス事件当時海軍次官をつとめていた財部彪ときわめて緊密な関係を形成する。²⁸⁾なお、山本盛正（のち川崎造船所取締役）、松方正彦（松方正義七男）、山路一善（のち軍令部参謀）、上村従義（西郷従道二男、上村彦之丞の養子）²⁹⁾らも山本権兵衛の女婿である。なお大正 3 年に暴露された海軍の収賄事件の容疑は、海軍首脳のみならず三井物産にも及び、当時東京本店の理事をしていた山本条太郎を退社させるとともに、山本権兵衛首相、斎藤実海相、財部海軍次官らの予備役編入と第 1 次山本内閣の総辞職を招いた。

（7）杉浦重剛との出会い

山本条太郎が杉浦重剛の家塾称好塾にコミットしたのもこの共立学校時代であった。伝記には、山本が自ら望んで杉浦の「学僕」となり、労役に服しながら勉強した、とある。また杉浦と山本の関係は、『統対支回顧録』³¹⁾にも『東亜先覚志士記伝』にも触れられている。とくに後者では、「杉浦重剛の許に書生として寄食」³²⁾していたことが明記されている。

杉浦については別稿でとりあげておいた。山本が共立学校に入学した当時、杉浦は病気のためイギリスより帰国し、とりあえず、9 月まで箱根湯本福住において療養、その間に『有機化学沿革史』の訳出につとめた。それから小石川区表町の貞照庵に居を定めた。これは伝通院の末寺であった。

古島一雄は山本と同じころ共立学校へ入ったが、問題を起こして退学を命ぜ

28) 『財部彪日記（上・下）』（山川出版社、近代日本史料選書、第12巻 1 号及び 2 号、1983年）には、松方幸次郎が再三再四登場する。

29) 財部をめぐる人々については、同書、上巻「解説」9～13頁を参照。

30) 『伝記』25頁。

31) 東亜同文会編『統対支回顧録』下巻（昭和16年）146頁。

32) 黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下巻（昭和11年）793頁。

33) 拙稿「江州系企業者と準拠集団(一)——住友財閥と杉浦重剛」（『研究紀要』第21号、昭和63年3月、27～82頁）同「江州系企業者と準拠集団(二)——杉浦重剛のマジナリティー」（『研究紀要』第22号、昭和63年9月、1～65頁。）

られ、二、三の学校を転校した後に杉浦に弟子入りし、貞照庵に住むようになった。³⁴⁾松岡英夫は古島の少年時代の杉浦との出会いの意味を強調しているが、³⁵⁾本稿のペースブクティブにおいては、山本の少年時代の杉浦との出会いの意味もまた重要である。とくに杉浦は明治35年1月に東亜同文書院長となるが、同年4月の上海東亜同文書院行を記録した『塾主渡清日記』にみられるように、上海到着後直ちに山本が支店長をしていた上海の三井物産を訪ねている。³⁶⁾なお、杉浦の渡清については最終章でもう一度とりあげる。

ここで杉浦と山本の出会いの意味を考えねばならない。杉浦は明治9年から13年にかけて、第2回文部留学生として、ヨーロッパ、主にイギリスで生活した。病気のため挫折感をもって帰国したためか、後に「留学は足かけ五年に過ぎなかった」³⁷⁾と不満そうに記している。そして「自分の洋行して得た所」として、「理学宗」と「飽まで日本主義を執って変らなかった事」の二点をあげている。³⁸⁾

山本と杉浦の出会い、山本が14才から15才の時期になされた。教育家としての卓越した能力をもっていた杉浦がこの多感な時期を通過しつつある俊敏な少年にその精神的原基を伝えることは、比較的容易なことであつたろう。山本の内面には、叔父吉田健三や宏仏海らとの交流により、その頃すでに杉浦にたいするある種の共鳴盤(M・ウェーバー)がある程度まで培養されていたと考えられる。当時の杉浦の生活は、精神における伝統的・土着的要素の重視と、技術における革新の導入の強調、というすぐれてマージナルな態度によって特徴づけられていた。住友時代の伊庭貞剛、河上謹一、手島精一らはすべてこの態度を準拠棒とした。³⁹⁾そして三井の山本もけっして例外ではなかったのである。

34) 古島一雄『一老政治家の回想』(中央公論社、昭和50年)8～9頁。同『古島一雄清談』(毎日新聞社、昭和26年)4～7頁。

35) 松岡英夫「解説」271～272頁(古島『一老政治家の回想』271～276頁。)

36) 拙稿「江州系企業者と準拠集団(一)」74頁。

37) 『松浦重剛全集』第1巻(思文閣出版、昭和58年)、458頁。

38) 拙稿「江州系企業者と準拠集団(二)」37～38頁。

39) 拙稿「住友の経営理念——近代住友の多角化と理念——」52～54頁(『季刊日本思想史』第14号、51～65頁)。

山本が共立学校に通い、杉浦との出会いを果たしたところ、弟章雄が出生した。父武と継母でるとの間の子であった。「礪川文操」には、9月28日に「山本武次男名付願候ニ付命名章雄魚堅節二本被下候事」とある。なお、これより3週間ほど前には、山本条太郎が他の家職の息子たちとともに、松平康莊夫人となる人の「誕辰祝」に召し出されて一汁三菜の酒肴を与えられている。⁴⁰⁾それから約1年半後、山本は思い切って再び松平邸内の住居を脱け出した。肋膜炎に苦しんだからであるともいわれるし、継母との関係が悪化したからだともいわれる。⁴¹⁾

III 三井物産入社

(1) 三井入り

松平邸を脱け出した山本は先ず生母みつの姉その子を頼って宏仏海の家をたずねた。山本は暖かく迎えられ、共立学校へ通う代りに、叔父の吉田健三や鈴木善兵衛を絶えず訪問してそのコスモポリタニティを高めた。なお、鈴木は山本の生母みつの妹の夫であり、横浜で醤油醸造業を営んでいた。

山本が宏家の厄介になりはじめてから何ヶ月後に、国会開設の詔が下りはしたが、いわゆる明治14年の政変があり、参議大隈らが下野し自由民権運動にコミットするにいたった。そして吉田健三の準拠人板垣退助とその一派は自由党を結成した。これは前年3月に愛国社を改称してつくられた国会期成同盟のメンバーたちを中核としている。さらに古沢滋、小室信介、草間時福らのグループはその別働隊として大阪に日本立憲政党（党首は中島信行）¹⁾を結成した。山本の叔父吉田健三は、既述の如く、当時すでに横浜財界の領袖であり、これらの政治活動の資金調達につとめた。そして山本の三井物産入社もこの叔父とけっして無関係ではなかった。とくに吉田と馬越恭平との緊密な関係が注目されよう。

40) 『伝記』22頁。

41) 同書、28～29頁。

1) 『上野理一伝』216頁。

馬越恭平は明治9年7月に三井物産会社が設立されるとともに横浜支店長となった人物であり、東京から毎日横浜に通勤し、吉田をはじめとする横浜の実業人グループと緊密な関係を形成するにいたった。²⁾吉田はこの馬越に甥の山本を紹介したわけである。なお『伝記』の作者は、この山本の三井入りを「時代常識の逆行」としてとらえ、山本の三井入り自体がすぐれて逸脱的なものであったことを強調している。この強調は実に適格である。

山本はそれまでの「袴を穿いて大道狭しと闊歩した書生」の生活を捨てて、「条どん」と呼ばれる小僧の生活を選んだ。それは、共立学校から大学予備門を経て大学へ入り、官界にでも入って立身出世するというコースに見切りを付けたということを意味する。ただしこれは山本が立身出世をあきらめたということではない。この当時の山本の愛読書が『太閤記』であったことから明らかに、山本の身分上昇意欲はすこぶ高かった。もっとも「太閤崇拜」は、神島二郎によると、山本条太郎のみならず、安田善次郎、山下亀三郎、金子直吉、鳥井信治郎、小林一三、山岡孫吉などの「社会化の過程」においても、明確に検出されうるものであり、³⁾けっして山本に固有のものではない。ただ何故にビジネスの領域を選んだか、という問題は個人によって種々の解答が用意されよう。

山本がビジネスの領域を選んだプロセスは、すなわち、「前垂をはづし袴に代へるのが立身の常識であるのに、逆に袴を脱ぎ捨て、前垂掛けとなって荆棘の道に突入した」⁴⁾のは、伊庭貞剛の住友入りのプロセスとほぼ同質のものであった。⁵⁾この点については別稿で詳述した。つまるところは、権力の中核から離れたところで生きていたということと、身近に革新的な企業者活動を展開しつつある人物がいたということ、橋渡しの人物（伊庭の場合は叔父の広瀬率平、山本の場合は叔父の吉田健三）の存在、などがあげられよう。なお『伝記』の

2) 『伝記』39～40頁。

3) 拙稿「渋沢栄一における革新性の形成過程」229頁。

4) 『伝記』40頁。

5) 拙稿「伊庭貞剛の研究」17～20頁。

作者は山本の三井入りを「荊棘の道」にたとえ、「天の大任をこの人に下さんとする、先づその心志を苦しめ、筋骨を勞す」という孟子の文章で形容しているが、それまでマージナルな生活を送ってきた山本にとっては、この道こそ自己実現の過程であらねばならなかった。

さらに山本の場合、三井入り直前までの杉浦重剛との交流もけっして無視できないであろう。杉浦自身、真正の自己実現のために、体制から割り当てられた役割を拒否した。⁶⁾ しかも彼に固有のマージナリティにもとづき、ビジネスの領域での革新者群の出現の必要性を主張しつつあった。彼は新しい時代には新しい型の近江商人が活躍せねばならないことを力説した。⁷⁾ このため杉浦と緊密な関係にあった河上謹一や永元愿蔵は人生の半ばに住友入りし、松下丈吉は三井入りしている。⁸⁾ 三井入り直前の山本は吉田健三を準拠人とし、杉浦重剛を師としていたから、官界よりもむしろビジネスの領域に高い価値をおいていたと考えられよう。

さて、山本が入社した明治14年当時の三井物産横浜支店の従業員は、番頭、手代、手代見習、小僧、防方などを合わせて20各内外で、番頭格には世帯持ちの者もいたが、多くは店の二階に枕を並べて起臥した。「条どん」と呼ばれた山本もけっして例外ではなく、双子の着物に小倉の角帯、前垂れ掛けで忙しかけまわった、といわれる。⁹⁾ しかし山本のような例は当時けっしてめずらしくなかった。たとえば、のちに神戸、香港、門司の各支店長を歴任する長谷川銑五郎は、肥前唐津藩士長谷川久誠の六男であるが、明治12年に唐津中学校を中退し、翌13年に三井物産に入社し、長崎支店に勤めた。¹⁰⁾

注目すべきは、夜になると手代見習や小僧が漢学の先生から『論語』や『十八史略』の講義を受けたことである。独り山本の知識欲は異常なまでに旺盛だった。

6) 拙稿「江州系企業者と準拠集団(-)」17～18頁。

7) 同上、76～78頁。

8) 同、43～44頁。原武哲『夏目漱石と菅虎雄』（教育出版センター、昭和58年）111～112頁。

9) 『統対支回顧録』下巻、146～147頁。『伝記』41頁。

10) 『対支回顧録』下巻、1238頁。

(2) 逸脱行動

逸脱性¹¹⁾と革新性との関係を考えて、ここでどうしても山本の逸脱行動を確認しておく必要がある。幸い、山本の「社会化の過程」には、多くの逸脱行動を見出しうる。山本の『伝記』の異質性は、とくに青少年時代（具体的には三井物産上海支店勤務までの時期）に、山本に固有の逸脱行動に関する叙述があまりにも多いということである。たとえば山本は、小僧仲間の規範を破ったために小僧部屋で過酷な制裁を受けたが、あくまでも「降参」せず、制裁する方がつかれてしまったこと、「鋭い眼光と怪異な風貌」をもっていたこの少年は「なかなかのきかん坊で、上役の者など屁とも思っていない」ところがあり、自分の明白な失敗さえ認めず、このため上役に鉄の火箸で力一杯たたかれたこともあったが、平気な顔をしていたこと、このため下手をすれば「始末におへぬ人間になるぞ」¹²⁾と恐れられていたらしい。

このような山本の逸脱行動の基底には、当時とかく退嬰的な生活に墮し、その日暮らしをする傾向にあった上役や同僚にたいするある種の侮蔑の意識が横たわっていた。そしてこの侮蔑の意識が退嬰的な上役や同僚と山本との間にある種の社会的距離¹³⁾（social distance）を形成した。しかも山本はこの社会的距離を十分に意識していた。そして「利かぬ気」、「横着者」、「図々しかった」などというラベリングはこの少年の意識をより先鋭にした。¹⁴⁾このためこの少年は朝夕の拭き掃除から使い走り¹⁴⁾にいたるまで、人一倍機敏に迅速にその任務を果たし、社長益田孝への「伝達」や「取次」にはきわめて積極的に取り組み、益田とのコンタクトを狙った。当時、益田は誰にも畏れられており、「なるべく寄りつかない工夫」をしたものだが、この少年は益田とのコンタクトに臆す

11) 拙著『企業者史学序説』とくに第4章。

12) 『伝記』47～51頁。

13) このようなパースペクティブの有効性については、拙稿「渋沢栄一における革新性の形成過程」198～201頁を参照。

14) 逸脱と革新の理論における重要なアプローチのひとつとしての、社会的反作用のアプローチとラベリング理論については、拙著『企業者史学序説』144～146頁、162～163頁を参照。

るどころか、あたかもそれを積極的に享受するところが見られた。しかもこの少年は、新しい準拠枠を求めて、英語や漢学の勉強につとめるようになった。これは明治15年に横浜支店から東京本店に移ってからとくに顕在化してきた傾向である。他の小僧が入眠してから、押入れ内で勉強したらしい。それが発覚して制裁を受けることなどを恐れる少年ではなかった。¹⁵⁾

(3) 店則違反

山本が東京本店に転勤する直前に、叔父の吉田健三が『絵入自由新聞』を創刊している。¹⁶⁾当時の自由党は東京に『自由新聞』と『絵入自由新聞』を持ち、政進黨系の『絵入朝野新聞』と並んで、ルビ付きの社説や、翻訳政治小説などで大衆層への浸透を狙っていた、といわれる。¹⁷⁾おそらく山本はこの叔父が創刊した『絵入自由新聞』を丹念に読み、山本自身のみならず恩師杉浦重剛ものに大きくコミットすることになる東亜同文会と東亜同文書院の原点ともいえる興亜会¹⁸⁾の動きや大隈重信の改進黨結成の模様を知ったことであろう。なお、杉浦重剛は明治15年2月に東京大学予備門長になっているし、のちに三井の改革で知られる中上川彦次郎は同年3月『時事新報』に入り、記者生活を送り始めている。

山本が手代見習席に昇進したのは明治16年12月のことである。これは千葉県小見川の米の買い付けにさいして山本が証明した卓越した企業者的能力を益田孝が認めたことによる。¹⁹⁾その結果、山本の逸脱的な活動が益々逸脱的となった。この頃の山本には、のちの「小さな規則や慣例に捉はれず、仕事本位でその場、その場に応じて、善処する」という方法の端緒をつかんだという自信のようなものがあつた。ただし17才の手代見習になったばかりの少年が「規則何もの

15) 『伝記』51頁。

16) 『伝記』巻末の「年譜」4頁。

17) 『上野理一伝』216～217頁。

18) 興亜会は明治13年に米沢藩出身の曾根俊虎が宮島誠一郎らの協力を得て結成されたが、のち亜細亜協会と改称、明治33年に東亜同文会に合併された。『対支回顧録』1463～1464頁。

19) 『伝記』53～55頁。

ぞ」という態度で所嫌わず動きまわるので、色々と問題を起こすことがあった。²⁰⁾しかし「小僧では絶対に着用を許されぬ羽織が、公然着用される」こととなり、山本は得意満面であった。のちに山本が「自分の一生中最も愉快な瞬間であった」と述べているほどである。²¹⁾先の「礪川文藻」には、明治17年2月2日に「本日康莊元服祝洋行離杯旁招宴、山本条太郎（武倅）山本章雄（同人次男）」²²⁾とあるが、この時の山本は、当時の三井物産における業績主義的風土のシンボルとしての「羽織」を着用して旧藩主の前に出た。陥穽は山本がこの業績主義的風土を信じすぎたことにあった。この才気煥発の少年は、「道楽」を覚えたことや叔父吉田健三から横浜時代に教えられた弗相場に手を出していたことが発覚し、明治17年末に懲戒処分を受けるにいたる。当時の物産では、店員が相場に手を出すことは厳しく禁じられていたが、山本はこの店則を完全に無視して、「身分不相応の金」を所有していたのである。もちろん山本自身にとっては、これは「身分不相応の金」ではなく、叔父や馬越恭平がやっていたことをやってきただけのことである。しかも当時の山本は東京本店の相場速報係、として兜町に絶えず出入りしていた。²³⁾

この時の懲戒処分は本店追放を意味した。具体的には、（おそらく決定当初は無期限の）物産所有船頼朝丸での乗組員生活であった。²⁴⁾なお、この前年（明治18年）、のちに山本の後を受けて物産の上海支店長となる藤瀬政治郎が入社した。藤瀬は山本と同年（慶応3年）の生まれで、長崎県立中学校、長崎外国語学校を経て築地の商法講習所の全科を卒業したエリートであった。²⁵⁾明治19年に兵庫支店から（山本より2年も早い時期に）上海支店に転じている。天津条約（明治18年4月）が締結されて間もない頃で、上海支店は小規模なものであった。

20) 例えば、山本と馬越恭平との間のセメント買い付けをめぐるコンフリクトを参照。

『伝記』56頁。

21) 同書、55頁。

22) 同、22頁。

23) 『伝記』61～62頁。

24) 『伝記』66頁に「翁は何年間頼朝丸に乗組んでゐたか、これは三井物産の記録でも、当時知り合った人々の記憶でも、正確には判ってゐない」とある。

25) 『対支回顧録』1270頁。

なおこの天津条約締結のために派遣された伊藤博文全権大使の随員のひとりに牧野伸顕がいた。牧野は開成学校時代に杉浦重剛や長谷川芳之助と同期生であった。のちに三島通庸の二女と結婚することにより、鈴木馬左也（のち住友総理事）の実兄秋月左都夫と緊密な関係を結ぶ²⁶⁾。しかも牧野は大正8年から昭和9年にかけて、前後16年もの間、東亜同文会の会長をつとめた²⁷⁾。なお、牧野が秋月左都夫とともに顧問をしていた「一一会」には、十四会系の北条時敬、平沼騏一郎、鈴木馬左也らとともに、東亜同文書院の事実上の創設者である根津一も参加しており、牧野と西園寺公望や政友会との関係とともに、シーメンス事件以後の山本の動きを見る場合にとくに注目すべき組織である。この点については別稿²⁸⁾で詳述する。

IV イニシエーションとしての追放と海上生活

懲戒処分としての頼朝丸での生活は山本条太郎にとってはある種のイニシエーションとしての意味をもっていた。のちに物産の取締役となる川村貞次郎は、「頼朝丸の生活によって山本さんの総てが出来上ったやうです」と証言している¹⁾。山本が海上生活によって自己変革をなしとげたことは確かなようである。つまり、頼朝丸はこの20才の青年の「社会化の過程」の仕上げの場であったといえる。『伝記』の作者は、この船こそが「山本青年の人格を練成する恰好の修練道場」であり、山本の「運命を転換する舞台」となった²⁾、と記している。また『統対支回顧録』の著者も山本の海上生活を大きくとりあげて叙述し、これが山本に「一大転換」をもたらしたこと、しかもそれは「余程人目を惹きたるものの如く」であったことを強調している³⁾。

26) 秋月左都夫の妻その子は牧野の妻の姉（三島通庸の長女）。拙稿「1930年代の住友の企業者史的研究(Ⅱ)」12～18頁。

27) 『統対支回顧録』下巻、59～73頁。

28) 『鈴木馬左也』（昭和36年）299頁。

1) 『伝記』119頁。

2) 同書、65頁。

3) 間島興喜と福井菊三郎の証言に基づく。『統対支回顧録』下巻、148頁。

頼朝丸での生活が山本にとってある種のイニシエーション的な意味をもちえた理由としては、ひとつには、頼朝丸乗船により三井本店のお店者としての生活が切断され、突然千トンの石炭船の乗組員としての生活が強いられたということをおげることができる。しかも船長以下、船員はすべて「異人」であった。（大半はイギリス人であり、若干の中国人も乗船していた。）イニシエーションの条件がほぼ完全に準備されていた、といってもけっして過言ではなかった。

エリアーデはイニシエーションを「一個の儀礼、と口頭教育（oral teaching）群をあらわす」とし、イニシエーションの目的を「加入させる人間の宗教的・社会的地位を決定的に変更することである」としている。さらに「哲学的に言うなら、イニシエーションは実存条件の根本的変革にひとしい」とさえ述べている。⁴⁾

先ず第一に、山本がかつて松平春嶽を相手に勉強した英語や共立学校と店の夜学で修得した英語はまったく通用しなかった。もちろん海上生活は初めての経験であった。しかも船長ベンジャミン・ゴール（B. Gall）は、世俗内禁欲主義に基づいて生活する「宣教師」の如き人物であり、その夫人と機関長らとともに、山本にたいして英語の修得と「イングリッシュ・セントルマンの人格修養」や「礼儀作法の習得」を、異常なまでの熱意でもって、しかも徹底的に教えこんだのであった。つまり山本は「三井本店のお店者」としても、「夢想⁵⁾もしなかった特異のもの」を数年にわたって体験した。それはまったく異質の世界でのまったく新しい体験であった。なおこの時の体験を、約40年後に山本は次のように述懐している。

「俺は二十歳のとき道楽と相場を覚えたのを重役に知られて、陸から海の生活へ追ひ込まれた。千噸ばかりの貨物船で、上海と日本との間を航海して海員生活をしたものだ。船長が意地の悪い外国人でね、随分いぢめられたものじや⁶⁾」（傍点、瀬岡）

4) M. エリアーデ『生と再生』（堀一郎訳）東京大学出版会、1971年、16～17頁。

5) 『伝記』63～66頁。

6) 同書、66頁。

『伝記』の作者は、「意地の悪い」とか「いぢめられた」とかいう表現は「反語」であって、むしろ「細かく面倒を見られた」ということを指示するのだと述べているが、それはむしろ曲解であろう。我田引水といってもよい。というのは、ここで山本はあえて「道楽と相場を覚えた」と述べている。ところが『伝記』作者は、山本が「陸から海へ追い込まれた」理由をもっぱら「相場」のみに限定して「道楽」にはまったく言及していないことから知られるように、山本が、頼朝丸乗船時に既に、船長夫妻が一方的に押しつけてくるイギリス人のライフ・スタイルを素直に受容する態度を用意していたように、暗黙のうちに想定しているからである。事実、山本は、少くとも頼朝丸乗船前の山本は、世俗内禁欲主義から異常にかけ離れた⁷⁾ところで生活していた。必死に与えられた仕事をし、自発的に勉強したが、それはすべて山本に固有の「太閤崇拜」によるものであり、この点では、「一獲千金を夢みる」パリア的（ウェーバー的な意味での）若者であった。

山本が約40年後においてさへ船長夫妻との関係を「意地の悪い」とか「いぢめられた」という言葉で表現したのは、おそらく、何年にもおよぶ突発的な海上生活が、少くとも山本にとっては、エリアーデのいう「死の体験」を伴うイニシエーションであったからであろう。まったく異質な世界でのまったく異質な人々との相互作用関係には、極度のコンフリクトとテンションが必ず随伴するものであり、個人はまさにこのマージナルな状況を耐え抜くことができない⁸⁾ければ、境界線を突き切って、新しく蘇生することができない⁹⁾。結局、「意地の悪い」とか「いぢめられた」とかの表現は、山本が体験した海上生活が、イニシエーションの儀礼として高められるよりは、単なる事故とか事件へと下落してしまうような可能性があったことをある程度まで指示しているのである。ただしそれらは、約40年後に、満鉄総裁という社会的地位にあった人物から発せられたものであった。頼朝丸乗船時の山本の内面には極度のテンションとコ

7) 世俗内禁欲主義については、拙著『企業者史学序説』106～120頁を参照。

8) 河合隼雄「概説」45～48頁（『（岩波講座）精神の科学 6 ライフサイクル』岩波書店、1983年、2～54頁）

9) 同書、44頁。

シフリクトがうつ積し、死への恐怖感があったであろう。

船長夫妻や機関長が山本青年の「慧敏にして有為の材幹なること」を見抜いて、色々世話をしたり、細かく面倒を見たというのは、ひとつの結果論である。これらのイギリス人は、おそらく相手が山本以外の人物であっても、同じような態度をとったであろう。「根本的の基礎から築き上げた」「イングリッシュのゼントルマンの人格修養」とは元来そのようなものでしかなかった。

V むすびにかえて

『統対支回顧録』によると、「頼朝丸に乗組み内地支那間往復生活の後、明治二十四年即ち二十五歳の時、上海支店詰となり船舶方¹⁾となった」とある。

『伝記』とは若干記述内容が異なるので、これを額面どうりに受けとるわけにはゆかないが、山本が陸から海へ追放された後のマージナルな生活がかなり長期のものであり、過酷なものであったことは明白である。しかしこの長い苦しい時期を耐えることにより、山本は新しい型の人間として蘇生することができたのである。「獲得したもの」として「西欧文明社会の事情」を知りえたこと、「人格的感化による品位の向上」、「語学の習得」などがあげられているが、つまるところはエリアーデのいうように、山本の内面に「実存条件の根本的変革」が生じたのである。そしてこれが、上海支店勤務当初、山本が「法螺吹き」とか「奇を好む者」とか「空想の人」とか呼ばれて「嘲笑」の的となったこと²⁾の大きな理由であろう。要するに周囲のルーティーン的な人々には「変身」した山本の本質を理解する能力がなかったので、逸脱者として扱う以外に方法がなかったわけである。

山本の上海時代は約20年にもおよぶので別稿³⁾を必要とする。ここでは、上海支店勤務当初の山本が既に、企業者の洞察力をある程度まで備えていたことを強調しておきたい。のちに「全体に対する部分の価値といふものをしっかり掴

1) 『統対支回顧録』下巻、148頁。

2) 『伝記』74～77頁。

3) 『対支回顧録』下巻、461～496頁、554～560頁。

んで上海の仕事をする、初めて完全に出来た」（傍点、瀬岡）と山本自身が述懐しているが、この場合「全体」とは三井物産全体であるのみならず、三井全体、日本全体、アジア全体、世界全体へと拡大してゆくはずのものであった。そしてこのような思考のスタイルは、本稿において述べてきたように、叔父吉田健三・恩師杉浦重剛・頼朝丸船長夫妻・機関長との交流と数年におよぶ海上生活などにより、培養されてきたのである。とくに吉田からはビジネスと政治の関連性を、杉浦からはいわゆる「国粋」の意義を、頼朝丸ではヨーロッパ人の態度や価値観を、それぞれ丹念に吸収した。いずれも、山本が国際都市上海を拠点として企業者活動を展開してゆくための精神的基盤を構成する重要な要素となったものである。

近衛篤磨（のち東亜同文会会長）は、山本が海上生活を送っていたところに杉浦が陸羯南や高橋健三らとともに創刊した『日本』の最大の後援者のひとりとして知られる。この近衛にもっとも信頼されていた荒尾精は、明治23年に心友根津一と謀って、上海に日清貿易研究所を設立して「組織的大陸経営」に乗り出した。大森史子によると、日清貿易研究所は荒尾が3年にわたる「中国探査活動」に基づいて設立したもので、その背景には、「まず日清の融和提携を計り、両国の貿易を振興して、東洋をして富強ならしめ西力をして侵入の余地なからしめる」という目的達成にとり、「日清貿易振興の適当なる機関と、それに従事すべき有為の人材を養成することが最も緊急事である」という認識があった。⁵⁾

山本条太郎が初めての満州行を試みたのは、日清貿易研究所の設立の直後のことであり、また、根津一の『清国通商総覧』⁶⁾の刊行の直前のことであった。『伝記』には、先ず序文において、山本が「明治二十四年の昔、既に牛莊に乘

4) 大森史子「東亜同文会と東亜同文書院」84頁（『アジア経済』第19巻、第6号、76～92頁）

5) 同稿、同頁。小山一郎『東亜先覚荒尾精』（東亜同文会、1938年）44頁。

6) 根津が編纂した『清国通商総覧』全3冊は「二千余頁の大著」で「支那通商の指針」を提示したもの。「日清貿易必携」というサブタイトルが付されており、実業界にも大きなインパクトを与えた。『対支回顧録』下巻、468頁、555頁、666頁。

りこんだ日満貿易の先覚者」であることがとりあげられている。そして本文においても、あえて「満州一番乗り」という章が設けられ、山本の満州行が「やゝ探検的の性質を帯びてゐると同時に、上海前期における諸業績中の最大のもの」であることが喧伝されている。山本自身も明治24年当時、「満州における日本商人」は山本ただ独りであったことを誇りとしており、満鉄社長時代にもよくこのことを語った、といわれる。

この山本の満州行は、『伝記』には示されていないが、上海支店長上田安三郎の命令ないしは強い支持によるものと考えられる。安政2年に生まれた上田は旧柳川藩士池田源左衛門の四男で、幼にして上田家を襲き、苦勞力行ののち米国に渡り、ボストン商業学校に学び、明治9年に帰国後、直ちに三井入りした人物である。なお、この上田の米国行は長崎在住のロバート・ウォーカー・アーウィン(R. W. Irwin)の「支援」による⁹⁾といわれる。このアメリカ商人はのちに三井物産の顧問となり、実兄リチャード・アーウィン(R. Irwin)とともに、明治10年代の物産の発展に大きく寄与した。かれらは物産のロンドン支店の産みの親であるとともに、「貿易人」としての三井従業員の養成にも大きな役割を果たした。それはのちに山本条太郎が益田孝の支援の下に上海支店を中心に展開した「修業生の制度」(明治24年)、「清国商業見習生の制度」(同31年)、「支那修業生の制度」(同32年)、「清国貿易見習生の制度」(同44年)¹¹⁾等々の原点ともいうべきものであった。それはまた、後述するように、物産がのちに東亜同文書院の卒業生を多数受け入れたこと¹²⁾の理由のひとつでもあった。

この点については別稿で詳述する。ここではこれらの制度の創設者である山本が、アーウィン兄弟と同じヨーロッパ人とともに数年におよぶ海上生活を送ったことを、山本こそイギリス人が訓練し、育てあげた「貿易人」の典型であったことを、指摘するにとどめる。もちろん山本の生活史には、のちに東亜同

8) 『伝記』85～96頁。

9) 『対支回顧録』206頁。

10) 梅井義雄『三井物産会社の経営史的研究』(東洋経済新報社、昭和49年)53～54頁。

11) 同書、54～56頁。

12) 大森史子、前掲稿、88～89頁。

文書院の院長となる杉浦重剛との関係からも明らかなように、イギリス人的な貿易人の生活を送りつつも、日本の土着的ないしは内発的な要素をも徹底してとりあげてゆく、というすぐれてマージナルな態度が一貫して見出される。この点についても別稿において詳述されるであろう。

〔付記〕 本稿の基礎的なパースペクティブを御教示下された作道洋太郎先生に深く謝意を表します。なお、石川健次郎氏にも貴重なコメントをいただいた。